

小倉城下町の近代化－魚町遺跡第3地点の調査から－

1. はじめに

魚町遺跡第3地点は小倉北区魚町4丁目に所在する江戸時代を中心とした遺跡です。調査区は紫川の支流である神嶽川のすぐ東側にあり、付近の標高は約2mを測ります。発掘調査は旦過地区土地区画整理事業に伴い、3区に分けて行いました。調査面積は1区は290㎡、2区は1,210㎡、3区は573㎡で、合計2,073㎡です。調査期間は令和5年2月、9月(1区)、12月～令和6年2月(2区)、12月～令和7年2月(3区)です。

2. 近代化以前の魚町遺跡

調査区は小倉城の城下町の中に位置しています。近世の小倉城は慶長七(1602)年に細川氏によって築かれ、その後小笠原氏に引き継がれた豊前小倉藩主の居城で、紫川を挟んで大きく東西の曲輪に分かれています。西曲輪には天守を中心とした城の中核施設と武家屋敷、東曲輪には寺や町屋などが主に配置されており、幕末頃に描かれた『小倉藩士屋敷絵図』によると、調査区付近は東曲輪に位置する「郡屋舗」「町屋舗」「文殊堂」に相当します。

小倉城には城内の堀や道、各種施設の配置を記した絵図が多く残っており、それらを時期を追って見ていくことで城内の変遷を窺い知ることができます。

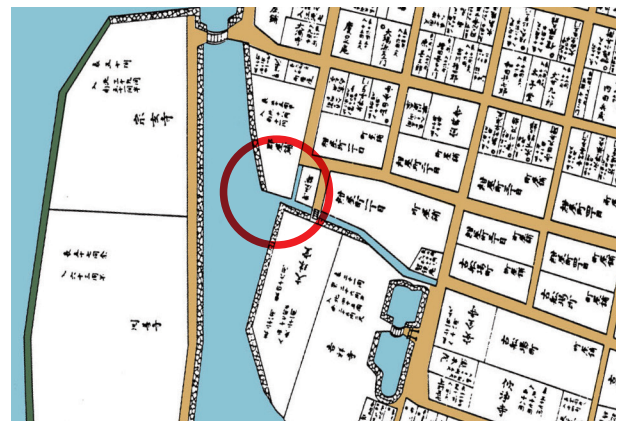
正保期(1644～48)の『豊前小倉城絵図』では、調査区に相当する位置に不整形な川岸が描かれています。この頃は細川氏に代わって入城した小笠原氏の初代・忠真の治世となっていました。付近の開発はまだ進んでおらず、自然の風景が残る川辺であったようです。

しかし、宝暦期(1751～64)とされる『豊前小倉図』には簡略な図ではあるものの、川岸が整った形で描かれ、区画内には「文殊」の表記が見えます。このことから、この時期には土地を造成し、建物が建てられるように整地が行われたと考えられます。これを裏付けるように、調査では砂利層の上に、18世紀代の遺物を含む造成層が堆積することを確認しました。

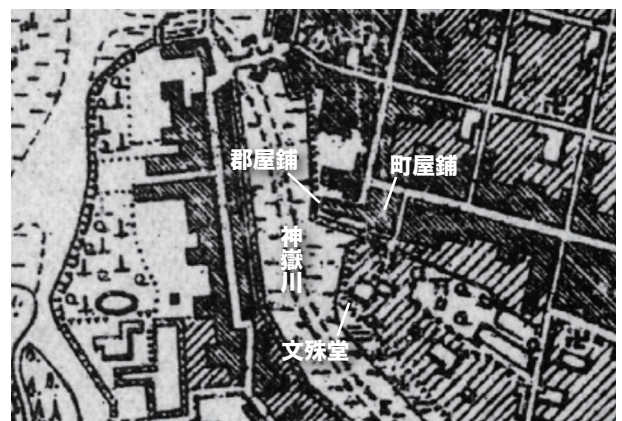
また、前述の『小倉藩士屋敷絵図』では、川に面する位置に石垣の表現が見え、石垣によってしっかりと護岸整備されていたことがわかります。実際の調査においても石垣が確認され、絵図に対応する位置関係を確認することができました。なお、近代の積み直しがあり、明治時代に入ってからもしばらくは使われていたようです。



遺跡の位置 (1/25,000)



『小倉藩士屋敷絵図』(幕末期、部分) ※赤丸が調査区付近



明治31年帝国陸軍測図地図 (1/5,000)



近世の護岸石垣とその前面に設置された土管 (1区、西から)



近世の石垣に貼り足して作られた近代の石垣（3区、北から）

3. 地図に見る近代の魚町遺跡

明治時代に入ると西洋測量術が導入され、地形や等高線を正確に写し取り、縮尺が明確な近代的な地図が作られるようになります。周辺の状況が分かる地図の一つに明治31年に当時の陸軍が測図した一万分の一の地図があります。この地図で調査区周辺を見てみると、『小倉藩土屋敷絵図』と比べて文殊堂の区画がやや狭く見えますが、ほとんど同じ形状であることがわかります。城内全体を見ても、絵図と合致する堀の形状や町割りが確認でき、幕末期の絵図がかなりの精度を持って描かれていたことがわかったと共に、明治の後半期ではまだ地形に大きな変化がなかったことが読み取れます。

一方、大正11年の地図では、川岸の形状が変化しており、明治期の地図と比較すると、郡屋舗と文殊堂の間が埋め立てられ、郡屋舗の西側にも土地が広げられたことがわかります。

4. 魚町遺跡に見る近代化

魚町遺跡で確認された近代の遺構には、石垣や土管、煉瓦塀などがあり、それと共に陶磁器やガラス製品、金属製品、プラスチック製品など多種多様な遺物が出土しています。

石垣は10ヶ所で確認され、近世および近代のものが確認されています。近世と近代の石垣を比較してみると、近世の石垣は「野面積み」と呼ばれる築石に自然石を利用したもので、横目地が通



近世の石組排水路の中に設置された土管（2区、南から）

らない「乱積み」と呼ばれる積み方をしています。一方、近代では、石材を落とし込んで斜めに目地が通るようにする「谷積み」が主流となっています。

土管は調査区内の各所で確認されています。1区では、堀として利用されていた神嶽川の護岸石垣の前面に陶器製土管が設置されています。この土管は周辺の建物からの排水を流し込むために、側面の一部を割って孔が開けられており、そこに素焼きの支管が差し込まれています。なお、接続部には隙間を埋めるための粘土が巻かれていました。また、2区では中央付近で確認された近世の石組排水路の中に土管が埋設されています。この土管には1区とは異なり、分岐させるための枝部が作り付けられており、そこに専用の陶器製支管が取り付けられていました。

大正末期～昭和初期、当時の小倉市では大規模な下水道敷設事業が行われており、今回の調査で確認された土管はこの時に埋設されたものと考えられます。また、1区と2区の土管には技術的な違いがあり、1区よりも2区で確認された土管の方が新しいものと考えられます。なお、下水道敷設は周辺の埋め立てと共に行われており、この際に近世の石垣が埋没し、埋立地の周囲には新たな石垣が築かれたと考えられます。周辺は近世の城下町から様変わりし、近代的なインフラ整備が進められていった状況が窺われます。

埋 蔵 文 化 財 通 信

埋蔵文化財調査室では令和6年度に『葛原（C）遺跡』『貫・裏ノ谷遺跡第2地点（2区・3区）』など、6冊の報告書と研究紀要39号、年報41を刊行しました。これまでに刊行された報告書等は各区の図書館にてご覧になることができます。

また、イベント情報や最新の発掘情報などはホームページにて公開しています。なお、イベント情報は市政だよりでもお知らせしております。是非、ご覧下さい。

公益財団法人北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室

編
集
・
発
行

〒803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目1-3
TEL(093)582-0941 FAX(093)582-8970
北九州市都市ブランド創造局文化企画課
〒803-8501 北九州市小倉北区城内1-1
TEL(093)582-2391 FAX(093)581-5755
発行日 令和7年10月21日

ホームページ

きたきゅうまいぶん

検索